

郷土こぼれ話

地域の神様 ⑦ 二十二夜さま（原島・今泉）

— 石塚晃さんとご家族の皆様にお話を伺いました —

二十二夜さまは原島今泉地区の神様です。JAくまがや大幡支店のすぐ北側に在ります。



今泉の二十二夜さま

二十二夜さまにぴったりの歌だと思っています。また、あるとき中にたくさんのお金が入ったビンを奉納された男性がいました。その浄財は祠を直したとき使用されました。以前は地域の人でお祭を行い、子ども達にはお菓子が配られたこともあったようです。石塚さんは、子ども達誰もが素直に育つように毎日ご飯とお水をお供えしているそうです。

二十二夜さまの正面には、「二十二夜供養 明和五戊子年 二月吉祥日」側面には「柿沼村 原嶋村 今泉講中」の文字が記されています。祠に

この神様は、子育ての神様と聞いています。何年か前、「二十二夜さまは238年前から、この地の子育てを見守っている」という話をご近所の方から伺いました。祠には、「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも」という万葉集で読まれている山上憶良の短歌が貼られていました。銀も金も宝石も、どうして大切な宝である子どもより優れていると言えるだろうか、いえ子どもが一番です。という意味だそうですが、

二十二夜さまにぴったりの歌だと思

は神社札が貼られ、改修前のものと思われる鬼瓦が二枚保管されています。祠には神社札が貼られ、改修前のものと思われる鬼瓦が二枚保管されています。また、紙粘土で作られたと思われる小さな地蔵さまが供えられています。明和五年(1768年)、江戸時代中頃過ぎから、今泉の女性や子ども達をずっと護り、地域の人から親しまれてきたことがよく分かります。

文献によりますと、二十二夜さまの主尊は「如意輪観音」であり、人々に富を施し六道に迷う人々を救い、願いを成就させるありがたい観音様です。江戸時代中期以降民間信仰に広く取り入れられ、女性の盛んな信仰を受けたと言われていています。二十二夜待ちは、陰暦二十二日の夜女性を中心にした講を作り、安産や婦人病の平癒を祈願したり、子どもの健康や成長を祈り、ときには夭逝した子どもの供養も行われたといひます。昔の農村の女性にとって仲間と会食やおしゃべりをし、様々な悩みを共有したであろう夜は大切な時間だったのでしょう。

ちなみに、江戸時代約250年の中頃過ぎは、飢饉や疫病がたびたび起こった時代でもあります。月待ちの行事としては十三夜や十五夜が有名ですが、二十二夜の月の出を待つのは大変なことです。11時過ぎ12時頃までの間に出る月を眠らずに待ち願いを掛けなくてはなりません。もしも眠ってしまったら、願いはかなわないといわれます。二十二夜さまは、埼玉県北部から群馬県にかけてたくさん分布されています。妻沼の聖天さまとその界限にもたくさんの二十二夜さまがあるといわれています。

今泉の二十二夜さまは、大幡の中心となる通りで江戸時代中期から、人々の願いをそして子どもや女性の成長や健康を護り続けてきてくださった「地域の神様」だったわけです。合掌。

文・写真：むらた ひとし

大幡公民館だより 平成28年10月号